

Bar のようなくつろいだ雰囲気、アートを語り合う場。

ドイツアート Bar

Creators@Kamogawa



日独のクリエイターが熱く語る! (日独同時通訳付)

座談会
「アートは都市を
どう変えるか」

Künstler im Gespräch „Stadt im Wandel - Impulsgeber Kultur?“
(mit Simultanübersetzung Deutsch/ Japanese)

2014年 **12月6日(土) 15:00** ~

会場: **ゲーテ・インスティトゥート・ヴィラ鴨川**

入場無料 (カフェ・ミューラーでの飲食は各自ご負担ください)

Samstag, 6. Dezember 2014, 15 Uhr / Goethe-Institut Villa Kamogawa / Eintritt frei

ドロテー・クリオ (舞台装置・衣裳デザイナー)
アンドレアス・ハルトマン (映像作家)
イェルク・コープマン (写真家)
スヴェン・プファイファー (建築家)
建島 哲 (京都市立芸術大学学長)
高橋 マキ (文筆家、京都カラスマ大学学長)
小崎 哲哉 (司会・構成)

Dorothee Curio (Bühnen- und Kostümbildnerin)
Andreas Hartmann (Filmmacher)
Jörg Koopmann (Fotograf)
Sven Pfeiffer (Architekt)
Akira Tatehata (Rektor, Kyoto City University of Arts)
Maki Takahashi (Autorin / Leiterin, Kyoto Karasuma University Network)
Tetsuya Ozaki (Moderator)

**GOETHE
INSTITUT**
VILLA KAMOGAWA

ドイツアート Bar Creators@Kamogawa

Creators@Kamogawa は、日本とドイツのクリエイターが、Bar のようなくつろいだ雰囲気、アートを語り合うイベントシリーズ。鴨川のほとりのヴィラ鴨川では、ドイツの芸術家たちが滞在して様々な創作活動を行っています。9月中旬～12月中旬まで京都にレジデンス滞在したドイツの芸術家たちが、3ヶ月間の滞在最後に、世界のアートシーンに精通するアートジャーナリスト小崎哲哉氏の司会のもと、京都を拠点に活躍する日本人クリエイターとともに語り合います。

今回のテーマは、『アートは都市をどう変えるか』。京都には多くの芸術家や芸術系大学が集まり、アートの未来を支えています。JR 京都駅付近に移転計画中の京都市立芸術大学の学長・建島 哲氏のお話をきっかけに、日本とドイツのクリエイターたちが、都市とアートの関わり方や都市におけるアートの力など、日独の視点から「芸術都市の明日」を見据えたディスカッションを行います。

座談会の後は、館内のドイツカフェ「カフェ・ミュラー」にて、ドイツビールやおつまみを片手に交流をお楽しみください。



© Gilles Revertgat

ドロテー・クリオ Dorothee Curio (舞台装置・衣装デザイナー)

1969年生まれ。ベルリンとヘルシンキで舞台装置と衣装デザインを学んだ後、舞台美術家・衣装デザイナーとして、ベルリン・フォルクスビューネ、アムステルダム市立劇場、パリ国立オペラなどの劇場で活躍。2013年ハイン・ヘックロート奨励賞受賞。京都滞在中は、自身で撮影した写真やグーグルストリートビューから、静止・崩壊・復興・変化という極の間で動く舞台装置のような空間モデルを制作予定。能や日本の現代演劇にも関心を持つ。ベルリン在住。公式サイト <http://www.dorotheecurio.com/>



建島 哲 Akira Tatehata (京都市立芸術大学学長)

1947年京都生まれ。1972年に早稲田大学文学部卒業後、多摩美術大学教授、国立国際美術館長などを経て、2011年より京都市立芸術大学学長。専門は近現代美術。1990年、1993年のヴェネチア・ビエンナーレ日本館コミッショナー、横浜トリエンナーレ2001、あいちトリエンナーレ2010のアーティスティック・ディレクターなどを務める。アジアの近現代美術の企画にも多数参画。詩人としても活躍し、1991年に歴程新鋭賞、2005年に高見順賞を受賞、2013年に萩原朔太郎賞を受賞。



アンドレアス・ハルトマン Andreas Hartmann (映像作家)

1983年生まれ。ポツダムで映像カメラを学んだ後、撮影監督として携わった映画「Little Thirteen」(2012)は、ベルリン国際映画祭をはじめ、数々の国際映画祭で上映された。ベトナムで撮影したドキュメンタリー映画「Tage des Regens (雨の日々)」(2010)は、パリ、トロント、ラオス等の映画祭で上映された。京都滞在中は、「伝統と現代の狭間に生きる日本の若者たち」をテーマにドキュメンタリー映画の製作に取り組む。ベルリン在住。公式サイト <http://www.andreas-hartmann.com/>



高橋 マキ Maki Takahashi (文筆家、京都カラスマ大学学長)

京都在住の文筆家。書店に並ぶあらゆる雑誌、書籍で京都特集記事の執筆、時にコーディネイトやスタイリングを担当。古い町家でむかしながらの日本および京都の暮らしを実践しつつ、「まちを編集する」という観点から、まちとひとをゆるやかに安心につなぐことをライフワークにしている。NPO法人京都カラスマ大学学長。京都精華大学、嵯峨芸術大学の非常勤講師もつとめる。著書に『ミソジの京都』(光村推古書院)、『読んで歩く「とっておき」京都』(三笠書房王様文庫)。



© apersopastyle

イェルク・コープマン Jörg Koopmann (写真家)

1968年生まれ。フォトジャーナリズムを学んだ後、1997年以降、ドイツ内外で主にドキュメンタリー写真を撮影。2001年ミュンヘン市写真奨励賞受賞。写真集「Sight-Seeing」で2012年ドイツ写真集賞の金賞受賞。彼の作品はピナコテーク・デア・モデルネ等のコレクションに収められている。FotoDoks フェスティバル創始者、Bookwithabeard 出版社設立者、キュレーターとしても活躍。京都では、カメラを通して社会的・建築的風景を探る。ミュンヘンとコペンハーゲンを拠点に活動。公式サイト <http://www.joergkoopmann.com/>



© 小崎哲哉

小崎 哲哉 Tetsuya Ozaki (司会・構成)

1955年東京生まれ。ウェブマガジン『REALTOKYO』『REALKYOTO』発行人兼編集長。CD-ROMブック『デジタル歌舞伎エンサイクロペディア』、写真集『百年の愚行』などを企画編集し、現代アート雑誌『ART IT』を創刊した。京都造形芸術大学大学院学術研究センター客員研究員、同大学院、同志社大学、愛知県立芸術大学講師。昨年、あいちトリエンナーレ2013のパフォーミングアーツ統括プロデューサーを担当した。今秋、『百年の愚行』の続編を刊行予定。



© msa munster school of architecture

スヴェン・プファイファー Sven Pfeiffer (建築家)

1972年生まれ。ハンブルク、マイアミ、フランクフルトで建築を学んだ後、ベルリン工科大学等で研究員をつとめた。ニューヨークのアイゼンマン建築事務所、ロッテルダムのNOX、ベルリンのKSMS設計事務所等で経験を積み、ソウルナム・ジュン・パイク美術館の設計にも携わった。2010年、自身の設計事務所 SPARC を設立。ミュンスター大学建築学科デジタル構想・設計部門ディレクターも務める。京都滞在中は、木造建築の新たな可能性を探る。ベルリン在住。公式サイト <http://sparc-lab.de/>

交通のご案内
京阪電車 出町柳駅より 南へ徒歩8分
京阪電車 神宮丸太町駅より 北へ徒歩6分



主催・お問い合わせ
Goethe-Institut Villa Kamogawa
京都市左京区吉田河原町 19-3
(川端通り荒神橋上る)
TEL: 075-761-2188 (内線 31#)
info@villa-kamogawa.goethe.org
www.goethe.de/villa-kamogawa



館内のドイツカフェ「カフェ・ミュラー」も、ドイツビールや軽食などをご用意して、皆様のお越しをお待ちしています。